

みならし、淺き山は既に皆ほりつくして、食すべき草は一本もさむらはず、八里餘も極難所の山を分入り、すみらをほりて此所へ歸れば、都合十六里の山道なり、歸りも夜の四つならでは得歸り着ず、朝七ツも猶遲し、其上近き頃は皆々空腹がちなれば、力もなくて道もあゆみ得ずといふ、其すみらいかほど取來るといへば、家内二日の食に足らずといふ、さて朝の夜より暮の夜まで十六里の難所を通ひ、三日三夜煮て、漸々に咽に下りかぬるものをほり來りて、露の命をつなぐ事、哀れといふも更なり、中にも大なる家だに斯のごとし、ましていはんや貧民のしかも老人少兒、又は後家やもめなどは、いかゞして命をつなぐ事やらんと思ひやればむねふさがる、

〔兎園會集說〕奥州南部癸卯三〇天明の荒饑

山崎美成略○中

何品によらず、食物に相成候類、過分の直段に御座候間、食物在々無御座、蕨野老、葛等を堀り食事仕候、夫も幾千萬人と申、限りなき事に御座候間、さしもの大山を忽に堀盡し申候間、葛蕨の粕、あも、さゝめなど申もの計食事に仕候に付、右の毒に中り、五體腫れ、大小便不出して、忽ちに相果候者數知れ不申候、當九月比、乞食共犬猫猿等を食事に仕候事承り候て、肝を潰し候處、去月よりは、犬猫は不及申、牛馬を打殺、食事に仕候、非人乞食等は、眼前犬猫をとらへ、鹽も付けず、喰候體、誠に鬼共可申哉、おそろしとも何とも可申様無御座候、略○中

一、唯今難澁の者共食事には、一あも香煎是はわらびの屑をたいき、さらし粉を取申候か、一松皮香煎、一同餅、一葉採香煎、一豆がら香煎、一犬たで香煎、一あざみの葉、略○下

〔救荒事宜〕草木をもて食とする事、水府の佐藤平三郎といふ人物産に精しき名あり、先達而出會し時、救荒の事を談せしに、佐藤いへらく、草根など堀り食ふても、人の腹にたまるものは少し、天明の凶年、余會津にて民どもにおしへて、山林にゆきて、あらゆる木葉を鎌にて芟り來り、湯引て食料とせしむ、それのみにてはやはり腹のもちあしき故猪鹿の類を取り、その肉を蟹節の